

# 複式教育

島谷あゆみ・宮本隆裕・八反田耕士

## 1 研究主題と複式教育について

本校は、平成27年度より「グローバル時代をきりひらく資質・能力を培う教育の創造」を研究主題に掲げ、グローバル時代をきりひらく資質・能力を「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」と定義した。グローバル時代をきりひらく資質・能力の要素には、①多様性、②協働性、③主体性があり、「協働的問題解決」を生起させる授業づくりに取り組めば、子どもの①多様性、②協働性、③主体性の育成が期待できるとし、研究を進めてきた。さらに今年度は研究を発展させて各教科等において学びを豊かにする指導法を明らかにすることで、系統的にグローバル時代をきりひらく資質・能力を培うことができると考えた。複式教育の構成上の特性は、少人数の学級編成と異学年集団による学級編成にある。本校の複式教育では、複式教育の特性を積極的に生かした実践の工夫を行うことで、児童の「自ら学ぶ力」「豊かな表現力」「他者とかかわりながら共に成長する力」を育成していきたいと考えている。これは、本校の研究主題に合致するものであり、複式学級の授業は協働的問題解決を生起させる視点をもつものである。児童の主体的な学びが成立する授業の実現をめざして、教員間で連携を図り、教師自身の「授業力」や「学級経営力」も高めていきたい。

## 2 複式教育を通して育てたい力

### (1) 自ら学ぶ力の育成

複式学級の間接指導においては、低学年の段階から児童が自ら主体的に学習を進めていく力を身につけていく必要がある。本校では、異学年の児童が互いにかかわりながら、あるいはそれぞれ学年別で、自分たちの力で学習を進めていく姿を目標とし、教師は必要に応じて指導を行うという「見守り型」支援の立場をとっている。児童の司会を中心とした主体的な学習の経験を重ねることで、学習課題の共有、見通し、課題の追究、ふりかえりという学びを進める力を身につけるようにしたい。

○自分の考えを進んで表現し、互いの意見を聞いて話し合い、学習を広げ、深めていく。

○司会の進め方や中心となっている話題など、状況に応じて話し合いを進めていく。

### (2) 豊かな表現力の育成

児童が主体的に学習を進める場は、相互に表現し合う場でもあり、表現方法を学び合う場でもある。学んだことを自分の力で伝える場も保障されている。児童一人一人が数多くの自己表現の場に恵まれている複式のよさを生かし、どのような場面や集団にあっても、自分の考えに自信をもち、進んで豊かに表現する子に育てたい。

○どのような場面や集団にあっても、自分の考えをもち、進んで豊かに表現する。

○互いの意見を聞き、自分の考えを整理して、相手に分かりやすく表現する。

### (3) 他者とかかわりながら共に成長する力の育成

複式学級では、単式学級では経験できない日常的に様々なかかわりの場を経験することができる。例えば、係活動や当番活動、教室での暮らし、学習の進め方など、生活や学習を共にする中で、上学年児童は下学年児童に、これまでの自分の姿を重ねながら思いやりをもって接するようになる。このような活動を通して、他者とかかわりながら成長している自分に気付くことができる。下学年児

童は、自分たちの活動を支える上学年児童の存在に気付き、喜びを感じるとともに、その姿から自らも学ぼうとする。自分の姿をふりかえり、成果や課題を生かして、互いに支え合い、高まり合う学級集団にしたい。

○自分の姿をふりかえり、成果や課題を生かして、互いに支え合い、高まり合う。

○将来の見通しをもち、進んで周囲の環境から学ぼうとする。

### 3 子どもたちの「自立」をめざして

#### (1) 複式の特徴（よさ）を「自立」につなぐ授業づくり

##### ① 「見守り型」支援の充実

本校では、両学年の児童が自分たちの力で学習の進行を行う授業形態を構想し実践している。教師は、児童が主体的に進める学習を異学年同時に見守りながら支援をしていく。これを「見守り型」支援と呼んでいる。「わたり」による間接指導の中でいかに主体的に学習できるようになるかという考え方をさらに深めるもので、教師は個や集団の状況を見取り、必要に応じて適切な直接指導を行うというものである。両学年の学習を見守ることにより、児童の学習状況に応じて柔軟かつ臨機応変に指導に入ることができる。このような「見守り型」支援の実現に向けて、次の点を大切にしてい取り組みを進めている。

○学習の進め方の明確化

- ・「学習課題の共有、見通し、課題の追究、ふりかえり」の定着

- ・学年段階に応じた学習ガイドの活用

低学年：児童全員が学習ガイドを持つ、黒板に学習ガイドを書く。

中学年：学習リーダーのみが学習ガイドを持つ。

高学年：学習ガイドを用いなくて、活動カードなどを活用する。

- ・日直司会（学習リーダー）による学習の進行

学習ガイドは、あくまでも児童が主体的に学習するための手立てであり目的ではない。学習ガイドを用いない学習場面を1年生から作るようにする。複式学級担任や専科担当で日々の授業の情報交換を行い、学年に応じた「見守り型」支援の系統的な指導を検討する。また、協働的問題解決を生起させる方法の一つとして、ペアでの話し合い、4人程度での話し合いを積極的に授業場面に取り入れる。少人数の話し合いでは、聞き合う必然が生まれ、学年の実態に応じた話し合いの質的な高まりが見られると考える。学習リーダーは、その日の日直が行う。学習リーダーは、生活のリーダーともなる。児童が順番に学習リーダーを経験することで、学習を進める力や学習の流れを見通す力を身に付けることができる。

○問題解決の場における活動の観点や自己評価規準の提示

例えば、話し合い活動、板書については、段階的に次のような力を身につけるようにしたい。

**表1 系統性のある話し合い活動、板書**

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
話 し 合 い	話し方・聞き方、話し合いの仕方を理解し、学習リーダーを中心として話し合いを進める。	話し合いの観点に沿って、学習リーダーを中心に話し合う。	話し合いの観点に沿って、学習リーダーを中心に、話し合いを深める。
板 書	発言を聞いて、大体のことを書くことができる。	発言を聞いて、内容を正確に板書することができる。	発言を聞いて、内容を簡潔にまとめて板書することができる。

##### ② 学びを共有する場の設定

複式学級の最大の特色（よさ）は、異学年の児童が常に同じ教室に在ることである。学びを共有する場を設定することで、少人数学級においても多様な考えに触れる場を保障することができる。

○学年別指導（国語科，社会科，算数科，理科，家庭科，保健）

・異学年で同じ領域の学習に取り組み，導入を合同で行ったり，まとめや表現活動で交流したりする。

・同単元同内容異程度の学習を設定し，異学年で関わりながら学習する。

○A・B年度（生活科，音楽科，図工科），繰り返し一本案（体育科）

・同単元同内容異程度の学習を設定し，異学年で関わりながら学習する。

国語科では，作文，物語文，俳句・昔話や漢字など伝統的言語文化の学習，話す・聞くの学習，詩の学習，ペアトーク，グループでの話し合い等の表現活動で，異学年での交流を図る。算数科では，同じ領域の学習を行う場を積極的に設定する。生活科では，2年生が1年生をリードし「春みつけ」「学校たんけん」「元宇品探検」「町たんけん」等活動を行う。体育科では，陸上運動やボール運動，マット運動の学習等でグループ学習を行う。ボール運動やリズム遊びなど，上学年が下学年に技のポイントやアドバイスを伝えるなど，積極的に関わるようにする。このような学びを共有する場を工夫して設定し，多様な考えに触れる場を保障し複式児童どうしの関わり深めていく。

【昨年度の活動から】

複中児童から複低児童へお話の読み聞かせ



複中児童と複低児童の詩の交流



複高児童のリズムダンスでの教え合い



複高児童が協力してリズムダンスを発表



## （2） 行事や活動の場における手だて

### ① 下学年に受け継がれていく学習活動

教科の学習において，2年間継続した単元学習を計画することで，さらに豊かな活動が期待できる。A・B年度方式の学習では，児童の構成は変化しても学級集団としての経験の積み重ねは受け継がれていく。この「小さな伝統」のよさに着目し，より確かで豊かな学習を構築したい。

### ② 児童の手で企画・運営する活動

## ○複式集会

本校では、全校で縦割り班を作り、縦割り掃除や縦割り遊び、縦割り弁当などの活動を行っている。この縦割り班では、複式の1年と6年は同じ縦割り班に属している。複式学級では、全校での縦割り班の他に、「複式縦割り班」を作っている。この「複式縦割り班」では「たんぼぼ集会」を計画している。「たんぼぼ集会」は、高学年担当「1年生を迎える会」、中学年担当「いもパーティー」、低学年担当「6年生を送る会」である。集会の計画運営を行うことで、それぞれの学年のよさに気づき交流を深めることができる。「1年生を迎える会」「6年生を送る会」は保護者の参観もあり、保護者へも複式学級のよさや子どもたちの成長を伝えることができる。また、保護者どうしの交流の場にもなっている。「いもパーティー」は、9月にじゃがもの種芋を植えて、12月に収穫したじゃがいもを使って調理する活動である。複式縦割り班は、一学年1名ずつの6名で構成されている。調理は高学年児童を中心に、低学年、中学年がそれぞれ役割を分担しながら行っている。他の集会でも、やはり高学年がリーダーとしての役割を果たし、学年の縦のつながりの強さや温かさを感じることができている。これらの集会でも「小さな伝統」が受け継がれている。

### 【昨年度の活動から】



### (3) 日常的な子どもどうしのかかわり

1年生が入学してくると、6年生はもちろん、他の学年も複式低学年の教室に行き、名前を聞いたリ、自己紹介をしたりする。日常的にも、休憩時間には、上学年児童が下学年の教室を訪れたり、下学年児童が上学年の教室を訪れたりしている。また、一緒に遊んだり一緒に登下校したりする姿も見られる。日々の生活の中での自然な関わりから、さらに交流が広がるように声をかけていきたい。

#### 【参考文献】

全国へき地教育研究連盟、『ふるさと発「生きる力」を育む教育の創造』、2001.

広島大学附属東雲小学校、『複式教育ハンドブックー異学年が同時に学び合うよさを生かした学習指導ー』、2010.